夢童

菅波　茂

2月21、22日。フィリピンのレイテ島で、地滑り災害1周年合同慰霊祭を実施した。

昨年2月、豪雨による山崩れが村全体を埋め、1000人以上の村人が亡くなった。特に小学校にいた250人の児童全員が亡くなった報道は世界中の悲しみを誘った。AMDA本部とインドネシア支部の合同チームが、避難所になっていたクリストレイ高校などで、緊急医療支援活動を実施した。

被災現場では、今なお、村人がまだ埋もれたままの状態である。合同慰霊祭は、AMDAが寄贈した被災現場の「チャペル」と、家を失った被災者のために建設された「新しい村」の2カ所で行われた。

後者での慰霊祭は朝9時から始まった。たたきつけるような豪雨が式の終わりまで続いた。この豪雨が山崩れを誘発したのかと思った。地元のカトリック教会聖職者の方々と、日本から参加された金光教平和活動センターの小林亘理事長、西村美智雄事務理事がそれぞれの様式に従って祈りをささげられた。

合同慰霊祭が終了した夜に、クリストレイ高校の生徒が創作の踊りや劇を披露してくれた。参加者の涙を誘った劇があった。山の木が切り倒されて、保水されなくなった水が山崩れを誘発して村を襲い、幼い子ども共々村人が土砂に埋もれていく内容である。演じている高校生たちが本当に絶叫して泣いていた。直視できなかった。亡くなった被災者は現在も村人の心の中では生きていた。

AMDAが寄贈したチャペルがわずか30万円で建設できた理由が納得できた。設計者はもちろん、村人総出のボランティア活動によって完成したからだった。「AMDA医療と魂のプログラム」の提唱者であり、AMDAインターナショナルの名誉顧問でもあるプリミティボ・チュア先生の提案により、チャペルの入り口には常時フィリピンと日本の国旗が掲げられることになった。レイテ島では第2次世界大戦中に日本軍とアメリカ・フィリピン連合軍との間に激闘があり、多くの日本兵が死傷した歴史を思えば感無量だった。

トロントロン

南レイテ医師会長のマトゥ医師に会えて幸せだった。フィリピンの法律では、外国人医師免許での医療活動は禁止されていた。1年前の災害発生時に、私はマトゥ医師に岡山から国際電話をかけた。

「95年1月の阪神大震災の時、貴国のラモス大統領が神戸の被災者に1カ月分の給料を寄付したことで、日本人は貴国民に対してとても親しみを持った。その貴国で大変な災害が発生したので医療チームを派遣したいと思っている。ぜひ、南レイテ医師会の権威、あなたの医師免許の下で医療活動を行いたい」。彼は承諾して、1週間にわたってAMDA緊急医療チームに付いてくれた。

合同慰霊祭の場で私の言葉に村人たちから拍手が沸きあがった。その言葉は現地語で「トロントロン」だった。「困ったときはお互いさま」の意味である。「なぜ、あなたは私を助けるのか」。「なぜ、私はここにいるのか」。「相互扶助」は宗教を超えてアジア・アフリカ・中南米の共通語であると再確認した。

（AMDA代表）